

## 「アクション映画の映画らしさ」

2016年3月19日(土)  
 ラニカイテラス 外苑前  
 参加：13名  
 司会・文責：野田

## 1. 概要：

- ・初参加者を一人迎え、主にアクション映画の魅力について対話し、アクション映画の映画らしさについては少し対話しました。

## 2. アクション映画の魅力：

- ・アクション映画は、アクションが起こされる理由につながるストーリー、いいかえるとドラマツルギーと、アクションの両方が備わっていて、両者がうまくつながっていることが魅力を生む。
- ・ドラマツルギーに関して、通常の状態が、他者によって破壊され、苦境にさらされ、それが主人公の努力とアクションにより逆転することで、カタルシスが生じる。単純な暴力では魅力がなく、悪を制裁するとか、復讐するといった、感情移入できる美学が必要で、映画の世界観や、主人公の人生を、リアルに感じられることが重要である。主人公が他者によって死の危険にさらされるなど、視聴者の誰もが共感できる普遍的な感情が描かれることで、ドラマツルギーが生まれる。ジェットコースターのようなテンポの良さが必要である。
- ・アクションに関して、常人では出来ない動きを生身の人間が行うことが魅力を生む。アニメーションやコンピュータグラフィックスや特殊効果により、常人では出来ない動きを映像化することは出来るが、自分の延長線上にある生身の人間が関与することで、感情移入することが出来る。乗り物が動いたり、爆発することにも迫力があるが、生身の人間が関与することでドキドキ、ハラハラが生まれる。
- ・アクションは、洗練された、キレのある動きが美しい。軽業と共通する。スポーツと似ているところもあるが、アクション映画では見せ場だけを切り出すことで、緊張感が保たれる。
- ・アクションは、演出、いいかえると表現であって、テーマそのものではない。アクションは、視覚効果、編集、撮影、特殊効果、スタントマンなど、多数の専門家が持っている技術を寄せ集めてできる、一種の表現である。それぞれの分野で技術革新が起きることで、表現の幅が広がり、アクションの新しい魅力が生まれる。文学では、新たな文体など、表現の幅を広げた作家と作品に対して芥川賞などの賞が贈られるが、映画では、アカデミー賞で撮影賞などの技術に関する賞で表彰される。作品賞としてはとりにくく、作品そのものではなく、技術としてしか評価されないことが多い。

## 3. 映画の魅力

- ・映画は、自分ならどうするか、場面においてその場で感じたり考えたりする臨場感がある。小説や漫画では、ゆっくり考えている暇があるが、映画には暇がなく、そのことが一種の臨場感を生み出している。

## 4. アクション映画の映画らしさ

- ・小説やテレビの映画化は出来るが、アクション映画の小説化やテレビ化は難しい。アクションは動的な視覚情報として伝達されるため、動的な視覚情報を伝達するのに向いている映画が他のメディアよりも良い。本、絵、漫画では文字情報や静止画情報として伝達されるため、アクションについて想像するという段階があり、映画ほど迫力が出ない。テレビは映画と同様動的な視覚情報を伝えるが、映画館で見る場合映画はテレビと違って画面が大きく、画面以外の部分が暗いため、アクションに集中しやすい。また、音響システムが良いため、聴覚に関しても、テレビよりも集中できる。また、テレビと違ってCMがなく、上映時間全体にわたって映画に集中できる。
- ・主人公が陥った苦境を打開する方法がアクションであればカタルシスに繋がり、映画として成立するが、頭を使う方法だけであれば映画として成り立ちにくい。映画は基本的に動的な視覚情報を伝達するのに向いているためである。

## 3. まとめ：

- ・映画、アクション映画の特性について、時間、ストーリー、技術、情報伝達の仕組みなど、多面的に検討した。
- ・対話中に「アクションそのものにも爽快感など、主人公に関連付けた快感があるが、それは恋愛映画における恋愛とは違って、主人公の気持ちへの共感ではない。なぜアクションそのものに快感を感じるのか」という面白い問いが提起されたが、残念ながら踏み込めなかった。機会があれば取り上げたい。

以上